「朗読」「音楽」「映像」が文学を再構成し、これまでもっとも成功した国際ペン大会となった。

2011年9月23日～9月30日、早稲田大学と京王プラザホテルを舞台として、第76回国際ペン東京大会2010が開催された。メインイベントに初めての企画を盛り込み、参加者一同が「史上最高の大会」と口をそろえるほどの熱狂と賛辞に包まれた8日間となった。

「朗読劇」が会場をひとつにし、真の語り合いを導く。

国際ペンは第1次世界大戦後の1921年、敵対した国の文学者たちが戦争を反省し、文学者だけは敵対することなく話し合おうと考えたことから設立された組織で、日本は1935年に島崎藤村らが話し合って加盟した。もとより社会性の強い組織であるが、今回のテーマは「環境と文学」ということで、難しいテーマへの挑戦となった。

今回の大会のプロデューサーを務めた作家の吉岡忍さんに話をうかがった。

「日本で環境というと、エコとか動物愛護というようなものと思えるかもしれませんが、自然というカテゴリーには人間も含まれる。ですから肉体とか、死生観、宗教、体制など全てが環境になるのです」

今回の大会の最大の特長は、メインイベントである「文学フォーラム」に朗読劇を採用したことにある。「まさしく文学を語り合う行事にしたい」という日本ペンクラブの思いが、朗読劇となったのである。それまでの国際大会は、お互いが相手の作品を読んでいないため、深い話し合いができないままであった。会場で朗読劇を行えば、参加者全員がその文学に触れることができるのである。

「世界で1番古い叙事詩のイーリアスや日本の古事記をみてもわかるように、人間が何かを伝えたり描いたりする時に使ったのは声です。朗読劇は文学の原点ともいえる」と吉岡さん。

「第76回国際ペン東京大会2010」のパンフレット

パーカッションの演奏とライブの描画で朗読を演出

井上ひさし作の群読劇「水の手紙」

9月23日の早稲田大学大隈講堂、日本ペンクラブ会長の阿刀田高さんが、国際ペン東京大会のために書き下ろした最新作「闇彦」を、元NHKキャスターの松平定知さんが朗読し、フォーラムは幕を開けた。死生観を通して、自然環境を描いた作品だった。

以後、世界中の作家たち6人の作品が、朗読劇として演じられた。単なる朗読だけではない、そこに映像や音楽、時にはライブの描画なども加わり、二重三重の効果で大隈講堂はとびきり上等の文学シアターとなったのである。

朗読劇をみた作者自ら「人生最良の日」と賞賛。

『沈黙の時代のなかで書く』という作品では、アナウンサーの山根基世さんが朗読し、パーカッションの演奏と、ライブの描画で演出された。舞台では、米国の片田舎に生まれ、学生運動に揺れた1960年代の大学時代に自由に目覚めた少女の姿が見事に浮き出されていた。作者のサラ・パレツキーさんは、上演後「私の人生の最良の日」とさえ語った。自身の作品がさまざまな演出によって、まったく別の味わいを醸し出し、作者でさえも驚く舞台だった。

さらに、26日の「基調公演」として上演された井上ひさし作の群読劇「水の手紙」は、新国立劇場の研究生10人によって演じられた。世界の水問題を題材に人間の連帯を呼びかけた作品だが、この劇では奄美高校郷土芸能部が、孟宗竹や流木のパーカッションとサンシン、指笛などによる演奏を加えた。まさに「環境と文学」を象徴するような演目であった。これらの様子は動画で、日本ペンクラブのホームページからも閲覧できる。

華やかで感動的な文学フォーラムのある一方で、セミナーでは作家たちから深い言葉が多く語られた。

「日韓文学の夕べ」では、死刑と赦しの問題を扱った小説『私たちの幸せな時間』の作者、孔枝泳さんが登壇。「韓国文学では『赦し』が大きな主題です。日本の植民地支配や軍事独裁、多くの犠牲者を出した光州事件など、社会が赦すべき出来事があまりに多いから」と話した。

また、今年は言論弾圧にあった作家らを支援する獄中作家委員会が設立50年でもあった。服役中の中国の民主活動家、劉暁波氏へのノーベル平和賞授与の可能性が高まり、中国がノーベル財団に圧力をかけたとされる問題で、国際ペンは会期中に中国に抗議する臨時決議を採択している。

「この会を通じて、世界のさまざまな環境問題を再認識した。70億人という人口が共通して問題を投げかけている気がする。ここからまた文学の挑戦が始まる」

吉岡忍さんは大会を総括してこのように締めくくった。

参加者一同が「史上最高の大会」と口をそろえた

担当者より

AJOSCの助成が「史上最高の国際ペン大会」を生んだ

作家
吉岡忍さん

国内イベントに助成を行う団体はあるが、国際大会に対する助成の窓口はほとんどない。AJOSCの助成が「史上最高の国際ペン大会」を生んだと思います。これからも世界を見据えて活動を続けていただきたい、世界の文学者を代表して御礼申し上げます。